

むかしむかし、あるところに、男とおかみさんが住んでいました。家の窓からは、魔女たちの畑を見下ろすことができました。

あるとき、おかみさんは、お腹に赤ん坊ができました。すると、魔女の畑に植えてあるパセリが食べたくてしかたがなくなりまりました。

おかみさんは、魔女が留守の時に、窓から絹の縄ばしごを下ろして庭に降りて行き、パセリをお腹いっぱい食べました。次の日も、また次の日も、おかみさんは、毎日、魔女のパセリを食べました。

とうとう、魔女たちは、庭にパセリがほとんどなくなっていることに気が付き、だれがパセリをぬすんで行くのか、調べることにしました。

「みんなで出かけたふりをして、ひとりだけ残って隠れて見張ってしよう」

魔女が隠れて見張っていると、となりの家の窓から、おかみさんが縄ばしごを伝って下りて来ました。魔女は飛び出して行って、

「この悪党。とうとう見つけたぞ」といいました。

「ああ、どうか、許してください。パセリを食べたくてしかたがなかったのです。子どもが生まれてくるものですから」と、おかみさんがいうと、魔女はいいました。

「許してやろう。けれども、男の子が生まれたら、プレッツェモリーノと名前を付け、女の子が生まれたら、プレッツェモリーナと名前を付けるんだ。そして、大きくなったら、わたしたちの所へよこすんだよ」

おかみさんは泣き出しましたが、どうしようもありませんでした。

やがて、女の子が生まれました。男とおかみさんは、プレッツェモリーナと名前をつけ、たいせつに育てました。そして、そのうちに、魔女との約束をすっかり忘れてしまいました。

プレッツェモリーナは、大きくなって、やがて学校へ行くようになりました。

あるとき、プレッツェモリーナは、学校から帰る途中で魔女に会いました。魔女は、プレッツェモリーナにいました。

「いい子だね。家に帰ったら、おかみさんというんだよ。借りている物をわすれないように」

家に帰ると、プレッツェモリーナは、おかみさんに、いいました。

「魔女のおばさんが、借りている物を忘れないようにっていったわ」

おかみさんは、胸が張り裂けるようで、何もいえませんでした。

つぎの日も、プレッツェモリーナは、魔女に会いました。

「いい子だね。家に帰ったら、おかみさんというんだよ。借りている物をわすれないように」

家に帰って、おかみさんにいうと、おかみさんは、だまりこんでしまいました。

次の日も、また次の日も、プレッツェモリーナは、毎日魔女に会いました。

「いい子だね。家に帰ったら、おかみさんというんだよ。借りている物をわすれないように」

ある日、プレッツェモリーナがおかみさんに、

「今日も、魔女のおばさんが、借りている物を忘れないようにっていったわ」というと、おかみさんは、うっかり、こういいました。

「じゃあ、かつてにお取りっていつておやり」

次の日、プレッツェモリーナは、魔女に会ったとき、
「おかあさんが、借りている物をかってに取っていいと行ってたわ」といいました。魔女は、

「では、おまえのおかあさんは、わすれていなかったんだね」といって、プレッツェモリーナをつかまえて、連れ去りました。

魔女は、プレッツェモリーナを自分たちの家に連れて行きました。そして、真黒な炭置き部屋を見せて、いいました。

「今夜、わたしたちが帰って来るまでに、この部屋を牛乳みたいに真っ白にして、一面に空の鳥たちを描いておくんだよ。さもないと、おまえを食ってしまうからね」

魔女たちは出かけてしまい、プレッツェモリーナが泣いていると、戸をたたく音がしました。出て行って戸を開けると、少年が立っていました。それは、魔女たちのこのメメでした。

「どうして泣いているの、プレッツェモリーナ」

「あなただって、きつと泣くわ。魔女たちが帰るまでに、この部屋を牛乳みたいに真っ白にして、一面に空の鳥たちを描かないといけないの。さもないと、食べられてしまうのよ」

メメは、

「ぼくにキスしてくれたら、ぼくがぜんぶやってあげるよ」といいました。プレッツェモリーナは、いいました。

魔女に食べられたほうがましだわ

男にキスするくらいなら

メメは、

「なかなか上手な返事だから、ぼくがぜんぶしてあげよう」といって、まほうのつえをふりました。たちまち、部屋が真っ白になり、一面に鳥が描かれました。

メメが出て行くと、魔女たちが帰って来ました。

「どうだい、プレッツェモリーナ。ぜんぶできているかい」

「ええ。どうぞ見てください」

魔女たちは、部屋を見て驚き、顔を見合わせました。

「本当の事をおいい。わたしたちのいとこのメメが来たんだろう」
プレッツェモリーナは答えました。

いとこのメメなんて来ませんでした

わたしを生んだおかあさんだって

つぎの日、魔女たちは、プレッツェモリーナにいました。

「あしたの朝、大魔女モルガーナの所に行って、ベル・ジュッラーレの玉手箱をくださいっていうんだよ」

「わかったわ」

つぎの朝、プレッツェモリーナは出かけました。歩きに歩いて行くと、メメに会いました。

「どこへ行くんだい、プレッツェモリーナ」

「大魔女モルガーナのところに、ベル・ジュッラーレの玉手箱をもらいに行くの」

「知らないのかい。食べられちゃうんだよ」

「かまわないわ。これで終わりになってくれるのなら」
すると、メメが言いました。

「ここに脂身の入った鍋がふたつあるから、これを持ってお行き。しきりに開けたてすとびらがあつたら、脂身を塗ってやると通してくれるよ。それから、このパンをふたつ持つてお行き。けんかしてる犬がいたら、パンを投げてやると通してくれる。それから、この糸ときりを持ってお行き。靴直しがいて、靴をぬうためにひげや髪の毛を抜いていたら、これをやると通してくれる。それから、このほうきを持ってお行き。パン屋のおかみさんがかまどを手ではいていたら、これをやると通してくれる。何事も、すばやくしなくてはいけないよ」

プレッツェモリーナは、鍋とパンと糸ときりとほうきを持って出かけました。とちゅうで、しきりに開けたてしているとびらがあつたので、脂身をぬりつけてやると、とびらは喜んで通してくれました。少し行くと、二匹の犬がけんかをしていました。プレッツェモリーナは、パンをひとつずつやりました。それから、ひげと髪の毛を抜いている靴直しにあつたので、糸ときりをやると、靴直しはたいへん喜びました。パン屋では、おかみさんがかまどを手ではいていたので、ほうきをわたすと、たいへん喜びました。

やがて、広場にやってきました。そこに、大魔女モルガーナの屋敷がありました。プレッツェモリーナが戸をたたくと、モルガーナが、

「ちよつとお待ち」といいました。プレッツェモリーナは、何事もすばやくしなくてはいけないことを知っていたので、ちよつとも待たないで、屋敷にすべり込み、階段をふたつかけ上り、モルガーナの部屋に飛び込んで、ベル・ジュッラーレの玉手箱を見つけると、つかんで走り出しました。モルガーナは、窓から身を乗り出していいました。

「おおい、パン屋のおかみさん、その女の子をつかまえな」

「いやだね。何年もつらい思いをしたあとで、この子はかまどをはくほうきをくれたんだから」

「おおい、靴直し、その女の子をつかまえな」

「いやだね。何年もつらい思いをしたあとで、この子は糸ときりをくれたんだから」

「おおい、犬たち、その女の子をつかまえな」

「いやだね、この子はパンをひとつずつくれたんだから」

「おおい、開けたてしているとびら、その女の子をつかまえな」

「いやだね、この子は上から下まで脂身をぬってくれたんだから」
こうして、プレッツェモリーナは、走り抜けました。

歩いていくうちに、プレッツェモリーナは、

「このベル・ジュッラーレの玉手箱には、何が入っているんだろう」と思いました。そして、がまんできなくなつて、ふたを開けました。すると、中から、小さな小さな小人たちが、わんさか飛び出してきました。小人たちは太鼓やラッパを鳴らして行進をはじめ、止まろうとしません。プレッツェモリーナは、小人たちを箱の中にもどそうとしましたが、ひとりつかまえば十人が逃げ出すしまつです。悲しくなつて、泣き出しました。そこへ、メメがやってきました。

「知りがり屋のプレッツェモリーナ。みんな君のしたことさ」

「ああ、ちよつと見たかつただけなのに」

「もうどうしようもないさ。でも、ぼくにキスしてくれたら、元通りにしてあげよう」
プレッツェモリーナはいいました。

魔女に食べられたほうがましだわ

男にキスするくらいなら

メメは、

「なかなか上手な返事だから、ぼくがもとどおりしてあげよう」といって、まほうのつえをふりました。たちまち、小人たちは玉手箱の中に入ってしまいました。

プレッツェモリーナは、帰って来て、

「はい、玉手箱を持ってきてあげたわよ」といって、ベル・ジュッラーレの玉手箱をわたしました。魔女たちは、ひそひそ話し合いました。

「大魔女モルガーナは、どうしてあの子を食べなかつたんだろう。わたしたちが食べなきやならないよ」

夕方、メメがやって来たので、魔女たちはいいました。

「知ってるかい、メメ。大魔女モルガーナが、プレッツェモリーナを食べなかつたから、わたしたちが食べなきやなくなつた」

「それはけっこう」と、メメはいいました。

「明日、大釜を火にかけさせて、お湯が煮立ったところで、あいつを投げ込むことにしたんだ」

「それはうまい考えだ」

魔女たちが出かけてしまうと、メメは、プレッツェモリーナにいいました。

「知ってるかい、プレッツェモリーナ。魔女たちは、明日、大釜にお湯をわかさせて、きみを投げ込むんだってさ。でも、きみは、まきを取って来るといって、地下室へ行くんだよ。ぼくが待ってるから」

つぎの日、魔女たちは、プレッツェモリーナに、大釜を火にかけるようにいいました。プレッツェモリーナは、かまどに火をつけてから、

「あら、まきがなくなりかけてるわ」といって、まきを取りに地下室へ下りて行きました。すると、そこに、メメがいて、プレッツェモリーナの手を取っていいました。

「ここだよ、プレッツェモリーナ。ついておいで」

プレッツェモリーナが、メメについて、地下室の奥に入ると、たくさん炎がゆらめいている所に来ました。

「これは、みんな魔女たちの魂なんだよ。吹き消してごらん」

プレッツェモリーナが、炎をひとつ消すと、魔女がひとり消えました。ふたりは、ひとつづつ炎を消していき、そのたびに、魔女がひとりずつ消えました。

しみに、ひととき大きな炎が残りました。

「これが、大魔女モルガーナの魂だ」

ふたりは、力を合わせて吹きに吹きました。大魔女モルガーナの炎は消えました。メメはいいました。

「これで、ぼくにキスしてくれるかい」

プレッツェモリーナは、メメにキスをひとつしてやりました。

やがて、ふたりは結婚して、大魔女モルガーナの屋敷で暮らしました。

パン屋のおかみさんは、侯爵夫人になり、靴直しは公爵になりました。二匹の犬は屋敷の中で楽々と暮らしました。とびらは、そこに置いてきたので、ときどき脂をぬりにいってやりました。

こうしてふたりは楽しく暮らしました。いつまでもなかむつまじく。それなのに、わたしには何ひとつくれなかつたよ

